

基礎研究と終身雇用

—社会の役に立つことを目指さず好奇心のおもむくままに—

生命環境系 林 純一

今回永年勤続表彰の榮譽を受けるにあたり、最も感謝しなければならないのは「永年勤続が許される終身雇用のポストが提供されたこと」ではないかと思う。昨今の学位取得者の就職状況をみると一層その思いは強くなる。そして、もっと感謝しなければならないのは、そのポストの使命が「社会の役に立つこと」を最優先としていなかったことかもしれない。ただし、このようなポストに恵まれたのは当時としてもとても運のいいことで、それは何ととっても大学院時代の恩師と先輩のおかげなのである。

実は、学位を所得してすぐに就職できた埼玉県立がんセンター研究所から提供されたのは終身雇用ポストではあったが、その職務は「がんの征圧」で、まさに社会の役に立つことが最優先されていた。もちろんこれは社会からも大いに期待されている明確な研究目標であり、埼玉県が提供してくれた素晴らしい研究環境の中で使命感に燃えて夜遅くまで研究に没頭した。それはおそらく大学院時代に馴染まれた基礎研究の面白さとはひと味違った「社会の役に立つ研究」の新鮮さが魅力的だったからなのかもしれない。しかし、がん研究はそれほど単純なものではなく、始めは魅力的と思った作業仮説のほとんどすべてに対して否定的な結果の連続であった。このため15年間のがん研究ではその都度まるで焼畑のように別のテーマで研究を再開しなければならない悲劇に直面した。

筑波大学に転任してからは、学生たちの多彩な才能に助けられ、社会の役に立つ研究にとらわれない遊びの研究（基礎研究）を始めることができた。学生たちは卒業後社会に出ると必然的に会社の方針にしたがった実用的な研究（仕事）をしなければならなくなる。しかし大学教育の神髄は、高校までの教育のように教科書に書かれているさまざまな知識を受動的に詰め込むことではない。それは、己の好奇心にしたがって自由奔放な発想で未知の領域に向けて能動的に進める研究の面白さを体験してもらうことではないだろうか。なぜなら社会は、仮に研究職ではなくても、応用研究に携わった即戦力となる人材以外に、さまざまな課題に自由な発想と英知を持って臨機応変に対応できる問題発見・解決型能力をもつ人材も必要としているからである。

ところが国立大学が法人化された時から、社会に対する説明責任を果たすため、社会の役に立つ研究が重要視され、科研費等の補助金申請の際には、その研究が具体的にどのように社会にインパクトを与えるのかを記載しなければならなくなった。特に昨今では財政難から、無駄を徹底的に排除する仕分けの風潮が幅を利かせており、基礎研究の神髄である「無駄や遊びを許容する文化」は最早絶滅危惧状態にあるといえる。当然のことだが、いずれ必ず何らかの形で社会の役に立つはずだと思いながらする研究は本来の基礎研究の姿ではない。基礎研究の成果は、人類の叡智を超えた意外な展開をする可能性を秘めており、圧倒的に多い無駄の中から時として偶然に思いも寄らない展開をして、社会の役に立つことを目標としている研究領域に大革命を引き起こすことがある。社会が基礎研究を許容するのはその重要性を理解しているからに他ならない・・・と信じたい。

実は絶滅危惧状態にあるのは基礎研究だけではない。終身雇用制も同じ運命にある。今回の永年勤続表彰を機に運良く自分にオファーされた終身雇用制のアドバンテージは何かと考えてみた。おそらくそれは研究成果がすぐに出なくても焦ることなくじっくりと研究を続けられることにあるのだと思う。その当時はネガティブでも科学技術の進歩やその後の幾つかの新知見が重なり、当時はネガティブでもそれを捨てなかったおかげで10年規模の時を経て突然大きな輝きを発することがしばしばあった。初期に直面した焼畑のような研究戦略では、荒涼とした廃墟を残すだけでまともな研究成果は得られなかったはずである。しかし、これまでの国立大学では終身雇用にあぐらをかき、何もしなくてもいいと勘違いしていた教員が多かったのも事実である。終身雇用制が生み出すこの「怠けの温床」は早急に何とかしなければならぬ大問題である。

このような弊害が原因で絶滅危惧状態にある終身雇用制に変わって近年導入されつつあるテニユアトラック制は極めて魅力的な制度であり、若い当事者が常に緊張感を持って研究を遂行できることで研究業績の伸展は大いに期待できる。しかしこの制度は同時に「捏造文化の温床」になる危険性もはらんでいる。昨今では学位を取得した後に博士研究員になっても、数年以内に目立った研究成果を挙げなければ雇用停止を余儀なくされる。極端な例ではあるが、若手研究者には不正か雇用停止かの選択を迫られる局面が存在し得ることも想定範囲に入れておく必要がある。このような極度のストレス下で研究を行う必要のない終身雇用制の絶滅は何としても避けたいものである。先日（平成27年2月21日）の最終講義で紹介できた研究成果のすべてはこの終身雇用制の恩恵を受けたおかげで達成できたのだと確信している。



林先生の信念「No Evidence , No Life」を踏襲していく教え子とともに